

家庭分野での和服着装プログラムとしての盆踊り——「炭坑節」に着目して

弓削田 綾乃 (和洋女子大学)
長島 未玖 (和洋女子大学大学院)
柴田 優子 (和洋女子大学)

1. 研究の背景と目的

本研究は、民族舞踊のアプローチの一つとして、中学校の家庭分野に着目するものである。これまで、家庭分野の指導要領と教科書を検討した結果、衣文化単元で親和性があることがわかった(第73回大会)。それを受けて、家庭科の和服着装体験の一つとして盆踊りを行なうことを提案し、千葉県内の中学校で試行したところ、和文化・身体文化への関心が促されたことが示唆された(第74回大会)。また、教材として動画コンテンツを作成し、一斉教授で試用したところ、指導補助としての効果があったことを報告した(第75回大会口頭発表)。なお、時間や教室の状況を考慮し、体験する盆踊り曲は、「炭坑節」とした。

以上を踏まえて本研究では、中学校の家庭分野での和服着装体験プログラムにおける盆踊り曲としての「炭坑節」に焦点をあてる。曲目の背景や動作的特徴等を明らかにし、本プログラムに用いることの意義を検討したい。

2. 研究の方法

盆踊りに関する文献資料に基づき炭坑節の歴史背景を明示し、音源となるCDへの採録状況を調査した。また、文献・映像資料をもとに動作的特徴をまとめた。

実践調査としては、2022年9月、2023年9月に千葉県内の公立中学校の家庭科の授業で、炭坑節を実施した際の観察およびアンケート結果を分析した。授業プログラムは、①浴衣の構成を学ぶ②浴衣を着る③盆踊りを踊る④浴衣をたたむ⑤事後アンケート、というものだった。指導は、教員免許取得又は見込みのW女子大学生・大学院生・助手らが行った。①～⑤は2コマ連続授業の中で行い、盆踊りの時間は20～30分程度とした。

さらに、同じ中学校で2023年10月に実施された教科連携・地域連携活動について、指導計画をもとに内容を検討した。

3. 結果と考察

3-1. 音曲について

炭坑節は、明治時代に福岡県で生まれた民謡が原曲である。元来は炭坑の労働歌であり、採掘された石炭の中から不要物を除く作業をする女性らによって謡われたとされる。これをもとに編曲され、座敷唄となり振付がつけられた。1940年代

にレコード化され、流行歌となるに伴い、各地で踊られるようになった。

通信販売サイトで現在入手可能な盆踊り曲集音源の曲目を調べたところ、およそ95%に炭坑節が採録されていることが判明した。これにより、炭坑節が盆踊りの代表曲で、入手しやすいと指摘できよう。

3-2. 舞踊動作

炭坑節の所作は、①掘る(石炭をスコップで掘る・すくう動作)⇒②かつぐ(石炭を背の籠に入れる動作)⇒③さがる(一步引いて天をながめる動作)⇒④押す(石炭を積んだ車を押す動作)⇒⑤開く(石炭を地面に広げる動作)⇒⑥手拍子、という6手から成り立つ。いずれも、動作・動作を表す言葉・意味が結びついており、アンケートにも「昔の生活がわかった」「踊りの意味がわかって踊りやすかった」等の記述がみられた。

参考として、2012年に小学生を対象に複数の盆踊りを実践したところ、動きと意味が一致しにくい曲目よりも、動作・動作を表す言葉・意味が一致する曲目の方が、文化的背景が印象に残るといった結果になった。炭坑節にも同様のことが言えると考えられる。

アンケートでは、約半数に「普段とは違う身体の使い方」への気づきがあった。これはたとえば、日本の伝統的所作であるナンバや、浴衣着用による可動域の狭さ等が該当すると考えられた。

また、初回の実践では、運動強度が高い曲目を実施したが、空調設備が十分でない教室で体操服の上に浴衣を着用するため、季節によっては適さないと考えられた。

以上のことから、盆踊り曲として広く親しまれ、音源の入手が容易で、動作の内容や意味が理解しやすく覚えやすいという点で、決められた時間内での和服着装体験の一活動として、炭坑節は適していると考えられる。

3-3. 教科連携・地域連携への展開事例

実践校では、本プログラムの開始2年目に、家庭科の授業とは別に、総合的な学習の時間において、次の内容が計画・実施された。

単元名：地域学習、実施学年：3年生、連携教科：家庭科・技術科・保健体育科、体験する舞踊：千葉おどり。これは、保健体育の授業で、近在の日本舞踊家から地域に伝わる踊りを習い、まとめの回で生徒が動画コンテンツを見ながら浴衣を身につけ、輪踊りを披露するというものだった。

家庭科の授業での着装法と盆踊り体験とが活かされた事例であり、汎用的な内容から地域独自の学びへの応用が可能であることが示されたのではないだろうか。